20201220レムナント教会🎄クリスマス礼拝

 **平和の主イエス(ルカ2:8-14)**

　皆さん知っている通りに、いまは日本だけではなく世界中の人がコロナ禍で不安を抱えて生きています。しかし、よく考えてみると、コロナ以前は不安がなかったのかと言いますと、そうは言い切れません。また、このコロナが終息した後は不安が消えてなくなるのかと言いますと、それもそのようには言えません。コロナのために不安というよりは、人間はいつでも不安を抱えて生きる存在であると言っても過言ではないのではないでしょうか。多くを所有していれば安全で平和であろうと思うでしょうけれども、多くを所有している人も不安なのです。少し笑い話でしょうけれども、この所有、この豊かさがいつ崩れるのだろうという不安も持っているのです。逆に持っていないという人は、いちいちすべてがまた不安になってしまいます。病気のときは、健康な人は平和であるだろうとついつい思います。しかし、健康だからと言ってその人が心の平安を保っていられると思いますか。健康な人でも心の不安は否定できません。病気の人は言うまでもありません。これが人間です。そして、これが人生というものではないでしょうか。何も問題が起きず平穏な日々を送っている人は心の平安を保つことができると思うのでしょうか。皆がそのような勘違いをしていますが、何も問題がなくてもその人の心の中に不安がないとは限らないわけです。問題だらけの場合はもう言うまでもなく、朝起きたときから寝る前までずっと心配、不安の中で生きるようになるでしょう。つまり、人間というものは根本から不安を抱えて生きる生き物なのです。何がどう変わるかによって変わるものではなくて、根本の根っこの方に不安を抱えて生きる者であることをクリスチャンの私たちは覚えていないといけません。そして、私たちが見て経験している、ときには不思議だなと思うようなすべての問題が実は根底にあるこの不安から生じる問題だと言っても過言ではないでしょう。

　ですから、特にこのクリスマス礼拝を通して、クリスチャンの私たちがメッセージとしてしっかりと覚えていないといけないことは、形が違うだけであって、その形態が異なるだけであって、人々が不安を抱えてまことの安らぎと平安を探し求め、もがいているということです。どこの時代もどんな国の人間でもどのような状況に置かれていても変わりはありません。特に犯罪のようなもの、あるいは暴力に走ること、ときにはテロに加担してしまうことなどは、この世界中の問題になります。しかし、これもよく考えてみると、本当に心の平安、奪われることのない安らぎがあればこのようなことがあるでしょうか。心に不安があるがゆえに、それが限界にぶつかったので、自分なりにエスカレートして方法を探した結果が犯罪であり、またテロのようなものではないでしょうか。先ほども話したように、お金さえあれば、生活に不自由がなければ、私は穏やかに平安の中で生きていくだろうと思うでしょうけれども、それは勘違いです。

　あるお金に不自由がない中小企業の社長さんがいらっしゃいました。不自由がないどころではなくお金があふれんばかりの人でした。しかし、毎晩、飲み屋を転々としながら酔いつぶれる日々を送っていました。お酒が好きだからではありません。そのお金で本人のなかにある不安を解消することができないからなのです。ある歯医者さんは知識もあるし、また経済的にも何の不自由もありません。しかし、同じように昼間は仕事をきっちり成し遂げる、やり遂げる人ですが、仕事が終わった後は、また飲み屋を転々としながら、家に帰ることがないのです。心の寂しさ、心の不安、それを解消することができないわけです。お金がある人は皆がそうなのかとは言えません。しかし、お金そのものが心の平安をもたらすものではないということは間違いありません。そして、健康さえあればと思う人もいるでしょう。それで体の健康から心の健康を得ることができるとうたう人もいます。確かに病気より健康の方がいいかもしれません。病気の人はみな健康さえあれば私は平安に暮らせるのにと思うでしょう。けれども、健康な人の内側を探って触ったことがあるのでしょうか。健康だからと言ってその人の心の中に平安がしっかりと与えられるわけではありません。健康は人に平安をもたらすものではありません。それから、家族団らんであれば、それ以上何もいらないという人がいます。間違いなく家族がぐじゃぐじゃであるよりは団らんの方が穏やかかもしれません。しかし、家族間に何の問題がないからといって、個人、個人の中に心の寂しさ、不安というものがないとは言い切れないのではないでしょうか。心の平安というものは家族がもたらすものではなくて、個人の問題なのです。それなのに皆が家族のせいにしてしまったりします。だから、もう終わりにはなりません。個人的になかなか答えが見つからないので、結局は社会のせいにして、政治がしっかりすれば私も穏やかに平安な日々を送れるのではないかと政治のせいにする場合もあります。しかし、政治がどんなにしっかりしていてもひとりひとり個人の心の安らぎと平安を与えることはできません。また、多くの人が技術がもう少し発達して文明がもう少し発展していけば、今のこのような不安は解消できるのではないかとそこに希望を託して期待をしています。しかし、どんなに技術が発展しても昔から今を比べてみればすぐにわかることではないでしょうか。それなのに人間はそういう意味では学習しようとせずに、いつも自分をごまかして未来は変わるだろうと思い込んでいるわけです。これもあれもだめなので、仕事に没頭することによってなにもかも忘れようとする場合もあります。それで平安だと勘違いしたり、あるいは趣味にのめりこむことによって、このような不安を一時的に麻痺させる方法を選ぶ場合もあります。しかし、それは平安ではありません。それがちょっとエスカレートすると依存症に、あるいは中毒の方に走るようになるものです。そういったものによって人間の心の平安、安らぎ、人生を生きるために不可欠な最高の武器である、すべてのことに打ち勝つことができるまことの平安を得ることはできないということなのです。

　つまり、結論は明白です。人間に必要なまことの平安、安らぎというものは、この世から得られるものではありません。そのまことの平安、安らぎというものは、人が作ることもできないし、人が与えることもできないものなのです。それが今までの歴史を通して証明されているし、皆さんひとりひとり個人の人生を振り返ってもそれは明白な事実ではないでしょうか。それなのにいまだになぜそういったもののせいにしながら違う何かに平安を求めているのでしょうか。夫婦喧嘩の場合はほとんど相手にこの安らぎと平安を求めているからなのです。そこから得るものではないのに。住所、番地が間違えているからなのです。手紙を送ったときに番地を間違えていると結局は郵便局に戻ります。元に戻っちゃうのです。人々は勘違いの中で、別にそれが悪いとは言いませんが、形がいろいろ違う、形態が異なるだけであって、仕方がなくある人は犯罪、ある人は中毒など、皆まことの平安と安らぎを求めてもがいているわけなのです。しかし、それは人からは得られないし、この世が与えるものではありません。親が平安を与えたり、子どもから平安をいただいたり、夫婦の間で、家族の間で、社会からいただく、そういう勘違いはクリスチャンの私たちは最初から全部断ち切らないといけません。人間に必要なまことの平安、まことの安らぎは、創造主の神様が人間に与えられたプレゼントです。神様から与えられるものなのです。神様なしの平安と安らぎなどはとんでもない話なのです。それなのに神を離れた人類は、最初から今に至るまでずっとその勘違いの中にいます。それをさまようというわけです。聖書には創世記1：27、神様が人を造るときに他の被造物とは最初から異なって神のかたちに造られたとあります。それはどういう意味なのかというと、2：7を見ますと、人間をかたちづくってその鼻に神様ご自身が息を吹き込みました。その息は聖霊を意味します。それで人間となったと言われています。聖霊がともにおられ、神様が内側に入ってともにおられることによって、やっと人間という存在になります。犬や猫とは最初から違う存在なのです。神の霊なしにはまともな人間とは言えません。それが人間というものであり、人間の構図がそうなっているのです。それが人間というものなのです。

　それから、創世記2：1-3を見ますとこのように記されています。「こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。神は第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである」。これを安息、平安、安らぎと言います。創造の神様がすべての創造をなさって、それがパーフェクト、完璧だったという意味で休まれたという表現を使っています。このときから安らぎ、安息、平安というものが始まったということです。つまり、人間に必要なまことの平安、まことの安らぎ、世界中どこを走り回っても得られないまことの平安は、持っていても失っても全く関係ありません。得られない平安、安らぎというものは創造の神様、完全なるパーフェクトの神様がともにおられて、その神様が人間の主人となられて、その神様が人間の人生そのものに責任を持たれるときに生まれるものなのです。勘違いしないようにしましょう。奥さんが心優しい人間だから、旦那さんが本当に穏やかな人間だから人間の心に平安が与えられると勘違いして生きる人生はもうやめましょう。死の影の谷を歩いていても奪われない平安が本物の平安なのです。足が折れるから平安が奪われる、そういう平安は最初から平安ではありません。多くの人が健康を失うことによって健康の大事さが分かったと思うのですが逆だと思います。健康が幸せをもたらしたり、健康によって平安になるというものであれば人生終わりです。健康は行ったり来たりするものなのです。完璧で永遠に変わらない主がともにおられる、そこにこそ、そこにのみ平安があるわけです。勘違いから自由になるクリスマスになりますように。創造の神様、完全なる神様。人間の概念の中に完全、完璧という言葉はありますが、その概念は理解できません。それは神のものであり、神の領域なのです。創造主、人間には見られない完全なる神様がともにおられ、その神様が自分の人生の主人となられて、私の人生の責任を持って導かれることが分かったときに初めて生まれるものが平安です。だから、クリスチャンになってもなかなか平安を味わうことができない場合、ついつい条件、環境、状況のせいにしてしまって、それに振り回されて流されるというのは、平安というものが何か分かっていないからです。どこで平安を求めていらっしゃるのでしょうか。どこに平安があるのでしょうか。皆さんが求めているそこにはありません。番地が違うのです。この地上にはありません。

　しかし、残念ながら創世記3：1-7、この神様に罪を犯して、神様を離れることになったそのときから平安はすべて壊れ、初めて不安、恐怖、寂しさなどが生まれるようになりました。アダムとエバが恐怖を覚えて不安のあまりに身を隠す場面が紹介されています。それをパウロが正確にローマ8：15で「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく」と言われています。この神を離れた途端に、どのような人間もどの時代に生きる人間も、どんな肩書を持っていようが関係なく恐怖に陥れる霊、奴隷の霊を受けているわけです。それが不安の原因です。コロナが不安の原因ではなくて、それが不安の本当の根っこの理由なのです。その結果、エペソ2：3、いつも聞いている箇所なので、またその箇所かと思わずに真剣に聞いてください。生まれながら神の御怒りを受けるしかない存在になってしまいました。ですから、不安になるのが当然でしょう。へブル2：15、「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を」と言われています。一生涯持っている者も持っていない者も、偉い人間もダメな人間も犯罪者も裁判官も関係ありません。死の恐怖に全員がつながれて奴隷として生きているわけです。そこから何の平安を期待できるのでしょうか。世界中みな世の中で言っている平安、安らぎというものは偽物であり、一時的なものであり、逆に本物の平安をごまかしているものなのです。温泉につかって極楽、極楽というのが平安だと軽々しく言っているのですが、平安はそういうものではありません。そのような文化の中で生まれた時からずっと育っているので、それがしみ込んでいるかもしれません。そのためどうすればそのような心の状態になれるかと思うのでしょうが、それでは人生勝てません。環境はころころ変わります。健康も保証できません。財産も保証できるものではありません。お金はあって、またなくなるものです。貧乏で良いという話ではありません。しかし、そこに私たちに必要なもの、皆さんが求めているものは存在しません。一からやり直さないといけません。神の御怒りを受けるべき子らとして生まれ、一生涯死の恐怖につながれている、そこが不安の原因なのです。その不安の原因があるがゆえに人間は神様に会えません。自分で不安を解消するために偶像を作ってそこに拝むようになります。なぜなら不安だからです。また、宗教を作ってそこにのめりこんでいくようになります。なぜなら不安だからです。あらゆるあがきをして、あらゆるもがきをしています。その結果、精神的にも肉体的にも疲れていくようになり、様々な関係にひびが入り、最終的にはどんなに頑張っても結局パーなんだねということで虚無感に捕らわれるようになるしかありません。これが人間の実情です。よくドラマなどを見ると、事実に目を覚ましなさいといういわれる場合がありますが、今神様が私たちにおっしゃっていることです。何にそんなにも捕らわれているのか。何がそんなに気になるのか。目を覚ましなさい。感謝なことに人間には自分の手で平和と安らぎを得ることはできません。誰かが与えてくれることもできません。この世からも得られないものなのです。それをまず理解しないといけません。感謝なことに神様以外には不可能なことです。神様がこのような人を憐れみ、不思議な愛を持って、まことの平安を取り戻すために神様がキリストを約束されました。それがキリストです。

　そして、まず創世記3：15、このすべての安らぎを奪って全部壊してしまった張本人が悪魔、サタンです。蛇を通して変装して現れて、その蛇の頭を踏み砕く女の子孫として生まれると約束されました。そこにのみ平和があります。国際平和のため何かの条約を結んで紛争が解決した。それはもちろんありがたいことでしょうけれども、そこに本当の平和はありません。本当の平和は女の子孫にあります。蛇の頭を踏み砕いて、それから出エジプト3：18、犠牲のいけにえとして、人間の罪の代わりに犠牲になられることによって、不安をもたらした人間の罪をきよめられます。それから、イザヤ7：14、その名を『インマヌエル』と言いなさい。神は人とともにおられます。このすべてのことを完璧に全うされる方をキリストと言います。このキリストを送るから、このキリストによって奪われた平安、奪われた平和、奪われた安らぎを取り戻すことができます。そして、キリストが来られるまで忘れては困るから忘れないようにするために神様はあらゆる措置をとられたのですが、そこで一番大切な安息日を設けられました。安息日を守りなさい。安息日には仕事もしてはいけないとおっしゃいました。なぜならキリスト以外には方法がないので、他に何かがあるかのように思ってはいけないというメッセージなのです。いまでも日曜日に何もしないという律法ではありません。キリストだけが安息なのです。安息日を守ることによって、なるほど仕事にも人間にも世界平和にも自然にも動物にもペットにも安息などはない、キリストだけなんだ、キリストだけが安息なんだということを絶対に忘れないように神様はそのような措置を取られました。

　そして、いよいよその安息の主であるキリストがこの世に来られました。その日をクリスマスと言います。クリスマスは、クリス、キリスト様がこの世に来られたので、マス、その方をキリストとして受け入れてたたえようじゃないかという意味なのです。クリスマス。そこで今日の聖書の箇所にあるように、天使がこのクリスマスを知らせるために羊飼いをしている人々の所に現れてこのように賛美をしていました。「いと高き所に、栄光が、神にあるように」。神の栄光は何でしょうか。キリストを通して人間に救いと本当の平安を取り戻す、その約束が実現されたのだね。神は神なのだねということです。それから、「地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」。平和が平安が。だから、クリスマスの賛美の中に平安と平和という文句が入っているわけです。その方こそ十字架で死なれ、三日目によみがえられたイエス様です。イエスはキリストです。そのイエス様が神様の約束通りに十字架の上でおっしゃいました。すべてを「完了した」と。ご自分で、ひとりで人間の何も加えることなく、すべてを「完了した」と。私たちの安息のために、この世から得られない、人間からは得られない、まことの平安、まことの安らぎのために、それがなければ人生生きていけない、その不可欠なまことの平安をもたらすためのすべてを「完了した」とおっしゃいました。ルカ6：5には、そういう意味でイエス様ご自身がこのようにおっしゃいます。そして、彼らに言われた。人の子は安息日の主ですと。意味が分かるでしょうか。イエスは安息日の主、イエスはキリストなのです。そのイエス様が安息日の主であるがゆえに全人類に向かって、幸せと平安と安らぎを求めて勘違いの中でさまよっている人々に向かって、そして、結局得られないので疲れて重荷負っている人々に向かって、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」と招いていらっしゃるわけです。クリスマスはそのような日です。いまもそのイエス様はクリスマスの主、平和の主であるイエス様が、万軍の主として生きておられ、教会を通して、信者の唇を通して同じことをおっしゃっています。今現在もすべて、疲れて、重荷を負っている者は、イエスのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。そのイエスを無条件受け入れることです。何の条件などありません。これっぽっちも迷う理由などありません。イエス・キリストを心に平和の主、キリスト、救い主として受け入れるそのときに、ローマ10：13、だれでもイエスの御名を呼ぶものは救われます。だれでもなのです。そして、その瞬間、ローマ8：2、今まで知らずに捕らわれていた不安になるしかないし、また不安から出られない死と罪の原理に捕らわれていた人間が、その死と罪の原理から永遠に解放されることになります。そして、ローマ8：15、恐怖に陥れる奴隷の霊ではなくて、子としてくださる霊を受けるようになります。神の霊がその人に宿るようになります。ただイエスを受け入れるだけで。そういう人々にイエス様がおっしゃいます。今までどのような人生を歩いてきたのか。今現在どんなに辛い問題、どんな弱さを抱えているのか。将来にどういう不安を抱えているのか。もう終わりなのだよ。いらないよ。ヨハネ14：27、わたしは、あなたがたに平安を残します。この平安は、世が与えるものとは違います。そうでしょう。世が与えるものは平安ではありません。健康が何かをもたらしたでしょうか。その健康はまた廃れて行くものなのです。人間から何かを得たでしょうか。その人間もころころ変わるのです。勘違いしないようにしましょう。わたしがあなたがたに平安を残します。この平安は世が与えるものとは違います。もし皆さんがこのクリスマスのメッセージを聞いて、今までの勘違い、気になってしょうがなかったものをすべて断ち切ることができれば、皆さんは完璧にいやされます。他に何か気になるものが多いから病気なのです。何が気になるのでしょうか。何一つ答えにならないものなのです。昔の親でしょうか。今の家庭環境でしょうか。先ほども申し上げましたように、この世にイエス・キリストによるまことの平安と安らぎを取り戻した者は、この平安は世が与えるものとは違うので誰も奪うことができません。なので詩編23：4にあるように、死の影の谷を歩いていてもそれが私たちの平安を奪うことはできません。私は恐れることはありません。私は乏しいことがありません。だから、悪魔がギブアップするわけです。悪魔と真正面から戦うというレベルではありません。私たちはずっと上なのだから。下がれ。死の影の谷を歩いていても、首に銃を突きつけられても、私は恐れることはありません。刑務所の中でいつ死刑になるか分かりません。しかし、私を強くしてくださる方によってできないことは何もありません。私はどんな境遇においても満足する秘訣を心得ている者です。なぜなら私の満足は健康やお金、人、環境、状況、条件にあるものではなくて、私の満足はキリスト・イエスなのだから、キリストが平和、キリストが答え、キリストがいのち、キリストが義であり、キリストがきよめであり、キリストがすべてなのです。ぜひ皆さんにそのような神の国が臨まれることを祈りたいと思います。

　ということで自分がクリスマスを最高の祝福の日にするためには（最高の祝福の日ではありますが）このイエス様を平和の主として、キリストとして心に受け入れることです。それで罪が赦されて神様と出会いまことの平安を手に入れること、これこそが最高のクリスマスです。クリスマスまでにどのような計画を立てて、それがプラン通りに行ったのかどうかが最高のクリスマスではありません。クリスマスのいろいろな歌が歌われていますが、ほぼクリスマスではありません。讃美歌にあるクリスマスソング以外はできるだけカットしてください。クリスマスは恋愛ソングのためにあるものではありません。最高のクリスマスにしようではありませんか。そして、イエス・キリストを心に持っている者は、悔い改めつつ、この平安ではなくてどこから平安を求めて今までさまよっていたのかを悔い改めて、イエスの中にある平安、条件、状況、環境と関係ないまことの平安を深く味わい、自分の中にあるすべての不安を退け消していくこと、これこそが最高のクリスマスです。皆さんの心の中に、たましいの中に真っ暗な空に大きな星が輝いているかのように、皆さんの心の中にこのクリスマスの光が輝くことによって、不安、暗やみ、すべてのしわざが取り去られるようになること、これこそが最高のクリスマスです。そういう人はクリスマスを通して改めるようになるでしょう。このまことの平安、世界中どこに行っても得られない、みなが騙されているこのまことの平安を伝える、この平安を分け与える伝道者としての人生を残りの生涯生きていくと心から主の御前で決断すること、これこそが最高のクリスマスです。皆さんひとりひとりに2020年のクリスマス、世界中がパンデミックの中で不安と恐怖に捕らわれているこの年のクリスマスで最高のクリスマスになることを主の御名によって祝福いたします。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。ありがとうございます。パンデミックの中で変わることなくクリスマスを迎えることができありがとうございます。日々毎日がクリスマスであることを感謝いたします。そして、そのように日々を過ごすことができるように、クリスマスの主、平和の主イエス・キリストが私の心の中にいつも輝くことができるように、イルミネーションと比べることができない光を放つことができるように。そして、そのクリスマスの光が暗やみに捕らわれさまよっている多くの人に伝えられる伝道者の道が開かれるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。